

# 核心のエデン

創作魔文書鷹剣

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

全てを奪われた少女「アリサ・ロム・エーデン」、彼女は恩師と交わした約束を果たすために戦う。例え自らの命を削ってでも・・・

圧倒的に残酷な新世代「ヘビーノベル」、第一作がこの作品である。

# 目次

## 第一章 巣立ち

始まりの日	1
旅立ち	10
オールアン	15
採用試験	20
一握りの栄光	23
王国近衛兵団	27
近衛兵団の仕事	31

## 第一章 巢立ち 始まりの日

「ねえ知ってる？昔は本当に神様がいたんだって。」

少女は語りかけた、目の前にある石に向かって。

「でも人間が自分勝手過ぎるから、神様はいなくなっただって。」

もう戻らない、あの日々を思い出しながら・・・

「当たり前だよ、人間が自分勝手じゃなかったら・・・」

瞳に大粒の涙を浮かべ・・・

「こんな事にはならなかったのに・・・」

・・・哀しみが頬を伝った。

《新エヴリシルス暦10097年・ランシア王国》

エヴリシルス大陸の西端、歴史ある由緒正しきランシア王国。剣と弓を握り、信仰を捨て、鉄と科学が国を形作るこの時代にも、都会を一步離れば山と川に囲まれた大自然が広がる。そして静かな山奥の森の中にひっそりとある施設、そこそが親を亡くした孤児を引き取って育てる地「エデン」だ。

「ねえアリサ知ってる？王都の方でまた争いがあっただって。」

「ふーん・・・」

「また王政派の奴等が暴れてるらしい、先生がそう言ってたんだ。」  
「・・・。」

夕暮れ前のエデンの庭、浮かかない顔をして池の前に座りこむ少女がいた。「アリサ・ロム・エーデン」・・・彼女もまた、親の顔も名前も知らない孤児であった。浮かない顔をしている理由は単純明快、エデンにいる他の子供から「外」で新たな争いが起きた事を聞いてしまったからだ。

「なんでなんだろう・・・」

まだ十三年しか生きていない彼女には理解できない事だった。何故いつも人と人は争ってばかりなのか、同じ国で同じ言葉を喋り同じ学問を探究している筈の「ランシア人」同士がちよつとした意見の違いで争うのか。

「わかんない・・・」

「アリサ、こんなところで何をしてるんですか？」

「先生・・・」

アリサの姿を見つけて声をかけて来た「先生」。このエデンにいる子供達に教育を施し、一部の子供達と一緒に掃除洗濯料理等全てをこなし、更には剣術まで教えてくれる凄いい人である。因みに本名は誰も知らない。

「先生、何でみんな争うんですか？みんな同じランシア人なのに・・・」  
凡そ十三歳の女の子からは出てこない質問が飛び出した。こんな難解な質問にちゃんと答えられる人間はそう多くないだろう。

「人は善い事のためなら悪魔になれるからですよ。」

「・・・さっぱりわかりません、いつも先生はそうやって言葉を濁して・・・」

先生はいつも質問をすればわかりやすく答えを教えてくれるのだが、たまに難解すぎる答えを返してくる時もある。十五歳以下の子供しかいないエデンの孤児達が理解するには難しいにも程があるが、先生は長い人生のどこかで理解してくればそれで良いと思っている。

「それよりアリサ、算術の宿題はちゃんとやりましたか？」

「うぐっ・・・や、やりました・・・よ？」

明らかに嘘だとわかる、むしろ清々しい目線逸らしに思わず先生も苦笑してしまった。

「まあ明後日の授業までにやってくれば構いませんが・・・それよりアリサ、今から大好きな剣術の授業ですよ。」

「はいー」

アリサは算術と社会教育は苦手だが、剣術の勉強は好きであった。練習用の木刀を持ったその日から異様な程手に馴染むし、何よりそれ

ほど頭を使わなくていいから脳筋なアリサでも上手く出来るのだ。

「では・・・練習の成果を見せてもらいましょうか。」

先生はいつも両手に剣を持つ二刀流派の構えをとる。何故か腰に携えた剣の代わりに木の棒を使うし左手は逆手持ちだが。二刀流という手数の差でいつも片方の棒を弾いている内にもう片方の棒を防げないのだが、それに対してアリサが考えた作戦は至極単純なものだった。

「よいしょつと、さあ先生！今日こそ勝ちます！」

稽古場の隅にあつた木刀を拾い上げ、右手は順手左手は逆手で木刀を構える。先生の独特な二刀流に対し、その構えを見様見真似で真似してそのまま切りかかったのだ。これには先生も驚かされたが、先生とのリーチ差のは大きくアリサの間合いに入る前に先生の棒が木刀を弾く。何度かこの動きを繰り返したのちアリサは諦めて距離をとった。

「私の剣術を目で見て盗んだのは面白いですが、まだまだ力不足ですね。切る事に集中するあまり守りが疎かになっていきますから、今度はその二刀流で防御する練習もしましょうか。」

「はい・・・」

呆気なく惨敗したアリサはバツが悪そうに返事をした。彼女自身はこのまま何回でも挑戦したいのだが先生も忙しいし、何より剣術の練習は一日にできる時間が決められているのだ。練習も終わってアリサを彼女の部屋に送る道すがら、先生がちよつとしたお話を語った。

「・・・私の友人にとっても剣の腕がたつ人がいましてね、私の剣術も彼と共に完成させたものなんですよ。ですがどうにも折り合いが悪くなりまして、ここ十年は顔を合わせる事もできてないんですよ。」

「へー・・・」

「彼も此処に来ればきつと仲直りできるはずですが・・・なにせ彼は会う事も気軽にできないような立場になってしまいましたから、せめて頭を突き合わせて話し合う事ができればいいのですが。」

先生は時折エデンの外まで出かける事がある。大抵は数日かけて

用事を済ませているらしいのだが、きっとその時にかつての友人と会えないか試みていたのだろう。それだけその友人が大切な人なんだとアリサが感じた時、ある事に気がついた。

(私って・・・友達いないよね?)

エデンには同じ年ぐらいの子供がいくらかいるし、年下の子供と遊んだりする機会も多かった。だが彼らはアリサが物心ついた時から一つ屋根の下で暮らしているし、何よりも寝食を共にしている時点で完全に家族と呼べる存在だった。つまり、アリサには友達がいなかった。

(友達・・・か・・・)

エデンを取り囲む森、その外に広がっているであろう世界に思いを馳せる。いつか自分がエデンを出て外の世界に行ったら、出会えるのだろうか。「友達」と呼べる存在に・・・

「アリサ、浮かない顔をしてどうしました?」

「・・・先生、私ここを出たくありません。」

「急に何を言い出すかと思ったら、何故そんな我儘を?」

「エデンの皆は私の家族同然だし、ここを離れたら自分には何も残らないんです。親もいないし、住む家も無いし・・・」

こんな我儘が通らないのはアリサもわかっている。エデンは親のいない子供を育てる場所だ。だからアリサが大人になったらもう此処にはいられない。

「それでもいつかは単立たねばなりませんよ?」

「わかっています、わかっていますけど・・・私みたいなのが生きていられるのは、エデンぐらいしか・・・」

「誰もが同じ事を一度はいいました。それでも誰もが必ずエデンの外へ旅立つんですよ。」

「・・・」

いつもの先生とは違う、強い言葉での説得にアリサは黙ってしまった。ほとんど言い負かされた事よりも、どこか焦っているようにも見える先生の表情に内心驚いたのだ。

その後は特に会話も無く、夕暮れの中アリサの部屋に辿り着いた。

「では、また明日。」

「はい……」

大した返事も返さずに扉を閉め、部屋はアリサ一人きりになった。  
「先生……どうしたんだろ。」

疲れ果てた体を休めようと横になっても、さっきの会話で先生が見せた表情が気になって仕方がなかった。何故あんなに焦った表情を見せたのか、聡明で穏やかな人である先生が焦ったらしい様子を見たのは今日が初めてだった。

「気になるなあ……」

《その夜……》

「アリサ、いつか貴女も此処を出る時が来ますよ……」

エデンの屋上にて、先生の言葉は風に乗って遠く遠く東へと飛んでいく。かつて唯一無二の親友と出会ったあの街、アリサが大人になった時に頼る事になるだろうあの街に向かって……

「後何日あるのやら、私に残された時間は有限だというのに……」

自分の運命が既に決まっている事は今更嘆くような事じゃない、肝心なのは「いつその時が来るか」だ。まだまだ教え足りない、せめて一五の誕生日ぐらいは祝ってやりたいがそんな余裕は無いかもしれない。

「……盗み聞きは褒められた行為ではありませんよ。」

「先生、どうしてわかるんですか？」

「アリサ、一三年も教育していれば分かるようになって当たり前ですよ。」

物陰から現れたアリサに対し、優しく窺めるその姿はまさしく理想の教師像だろう。気配やら何やらでアリサが「居る」事は最初からわかっていたから先程の台詞はわざと聞かれたものだが、何を言っていたのかアリサが理解していない可能性はある。そのあたりをハッキリさせようと先生が話を始めた。

「何故こんな時間にこんな場所に？」

「ええと……中々寝れなくて、トイレ行こうとしたら先生がぶつぶつ独り言言ってたから、その……えつと……」



「嘘はいけませんと私は教えたはずですが？」

段々目線が逸れていくアリサ、先生の目を誤魔化せるはずはなくアツサリ嘘をついたのだと見抜かれてしまった。実際彼女ほど嘘がわかりやすい人間は他にいないだろう。

「うう・・・実は・・・」

呆気なく嘘を見抜かれたアリサは事の次第を自白した。先生が珍しく焦っているように見えた事、いつもと違ってアリサの話に思いつき反論してきた事、それらが気になったものだから尾行して後をつけた事・・・全て聞き出した先生はいつもの穏やかな表情をしていた。「盗み聞きはいけません、不安にしてみましたのなら謝りましょう。私はただ貴女に成長してほしいだけなのです。とはいえアリサ、あんまり夜中に出歩くものではありませんよ。ただでさえ貴女は授業中の居眠りが目立つというのに・・・」

「・・・はい。」

少しだけお説教されて不服だったが、先生に関しては自分の考え過ぎが原因だったみたいで安心した。

「とはいえ、私の身を案じてくれたのは感謝していますよ。」

後どれだけ時間が残されているかわからないこの身、誰かに心配されるのは悪い気はしない。本当なら心配をかけたくはないが、教え子に助けられるのも偶にはありかと先生は思っていた。

「ほらアリサ、早く部屋に戻らないと明日起きられなく——」

先生の話の遮って遠くから地響きが聞こえてきた。今まで聞いた事がないような轟音だった。

「先生今の音って・・・」

近くで何かあったのかも、そう口にしようとした時アリサは気づいた。先生の顔が今までに見た事が無いぐらい険しい表情に歪んでいた事に。

「ついに来ましたか・・・っ!!」

「先生？何が来たんですか、先生？」

「・・・アリサ、ついて来なさい。」

先生に誘導されてアリサはエデンの片隅にある倉庫に連れられた。

先生が開けた扉をくぐった途端に埃が舞い上がって咳き込んでしま  
う。

「ケホケホツ．．先生、こんな場所で何を？」

先生はアリサの肩を掴み諭すように優しく、それでいて力強く言葉を  
を発した。

「アリサ、私はいつかこの時が来ると思っていました。貴女に私の願  
いと意思を託す時が。」

「先生．．．？」

「次に貴女が目覚めたら、森を抜けて東の街を目指しなさい。きつと  
貴女の居場所がある．．．」

「先生、何を．．．」

「貴女にこれを．．私が長年使い続けた剣です。貴女ならきつとこの  
剣で、悪夢の連鎖を断ち切れます。」

「何を言ってるんですか．．．？」

先生が何を言っているかわからない。こんなに早口で捲し立てる  
先生の姿は初めてだし、急に愛用の剣を渡されて悪夢を断ち切るなん  
て言われてもわからない。

「先生．．．せんせえ．．．」

わからないのに、何故か涙が溢れ出す。

「アリサ、本当はもつと色々教えたかった。貴女に広い世界を見せて  
あげたかった。ですがそれはもう叶わない。ですから、最後に私と約  
束してください．．．」

外から轟音が聞こえてくる。もう時間が無い事を悟った先生は、  
たった一つだけ願いを口にした。

「アリサ．．．」

せめて、自分にできる事を成し遂げたのだ。

「幸せに、なりなさい。」

．．．ここでアリサの意識は途絶えた。

「・・・あれ？」

次に目覚めた時、アリサは真つ暗な空間にいた。

「ちよ、ちよつと狭・・・すぎ・・・おりゃーッ！」

この空間は小柄なアリサでも狭くて窮屈すぎる。何とかして脱出しようとした後、偶然にもその空間が傾いて脱出に成功した。どうやら先程まで入っていたのは倉庫に仕舞われている箱の中だったようだ。アリサが暴れたせいで横倒しになった箱達がそれを物語っている。

「いったあ・・・あ！そうだ、先生!!」

自分が抱えている剣を返すべく、アリサは倉庫を出て走り出した。一体何があつたのか、何故自分を箱の中に入れておく必要があつたのか、問い質したい気持ちでいっぱいだった。だが倉庫をでたアリサの目に飛び込んで来たのは、凄惨な姿に変わり果てたエデンの姿だった。

「え・・・？な、なんで・・・？」

建物はあちこちに傷ができ、今にも崩れ落ちそうだった。しかもその傷はどれも剣で切り裂いたような形状をしている。加えていつも子供達の声で騒がしかったのが嘘のように静まり返り、物音一つ無い不気味な空間へと変貌していた。

「・・・あ、そうだ！先生！せんせえー!!」

しばらくエデンの変わりように放心していたが先生を探していた事を思い出して走りだした。そしてしばらく走り続けた後、木陰で横になっている先生を見つけた。

「先生！よかった、無事だったんですね！一体これは何が・・・」

暫く一方的に声をかけ続けたが、先生は何も返事をしなかった。

「先生？」

まさか意識が無いのか・・・そんな事を思ってしまった先生の手を揺さぶって起こそうとした時、ある事に気づく。

「え・・・？」

先生が、既に息を引き取っていた事に・・・

「あ、ああ・・・」

アリサがあれほど尊敬していた先生は、彼女が知らない間に、死んでいたのだ。

## 旅立ち

涙が枯れてもまだ泣いた。いつの間にか雨が降り、頭から爪先までびしょ濡れになったがそんな事はどうでもよかった。誰よりも大好きで、心の底から尊敬していた先生が死んだ。その事実は一リサの心を穿ち、今にも崩れ落ちそうなほど体は震えていた。

「せんせえ．．．せんせえ．．．」

だがどんなに泣いても先生が起き上がる事はない。体に刻まれた幾つもの傷跡と服の下から滲み出る鮮血が彼の受けた仕打ちを物がっていた。

「せんせえ．．．」

自分に血がつく事も構わずにその体に覆い被さり、これは悪い夢だ。目が覚めれば先生がいて、いつもと同じように授業が始まる。だがそんな事を自分に言い聞かせても現実是不変わらない。やがて残酷な現実に一リサの精神は限界を迎え、眠るように力尽きた．．．

夢の中で先生の事を思い出す。今までにあった事、楽しかった日々、先生に怒られた苦い記憶．．．

『一リサ、ここが貴女の故郷なんですよ。』

心の中いっぱい広がる、先生との思い出。

『一リサ、泣きそうな時ぐらい誰かを頼りなさい。』

『無茶する事に慣れてしまうと、いつか気づかないうちに壊れてしまいますよ。』

ちよつと授業に集中してなくて、怒られた思い出．．．

『一リサ、また居眠りですか。あまり居眠りを繰り返すようなら補習ですよ。』

『一リサ、あたり夜遊びをするものではありません。明日寝坊してもいいんですか？』

『一リサ．．．』

「．．．．．せんせえ．．．」

漸く目が覚めた。しかし目が覚めたところで現実は何も変わらな。血を流して横たわる先生が動きだしたりはしないし、消えてし

まったエデンの子供達が姿を現したりはしない。

「何で・・・何で・・・」

頭の中で言葉が反響する。

「何で私ばかり・・・」

また奪われた。彼女の過去はたった十三年しかないが、その十三年は圧倒的に残酷で、悲惨な人生だった。生まれて間もなく火災によって両親と生き別れ、今生きているのかさえ分からない。そして見つけた自分の居場所であるエデンさえも理不尽に奪われた。自分が知らない間に。

「うう・・・あつ、あつ・・・」

呼吸が荒くなる。息を吸う事さえ辛い。現実を前にまた精神が限界を迎えようとしていた時、側にあつた剣の事を思い出した。

「先生の剣・・・私にくれた剣・・・」

(次に貴女が目を覚ましたら、森を抜けて東の街へ行きなさい。)

思い出した先生の言葉、東の街へ行けという言葉がアリサの心に響く。いつのまにか雨は上がっていた。

「・・・やらなくちゃ。」

震える足で立ち上がり、先ずは自分の部屋へと戻る。幸いにもこの辺りは荒らされておらず、変わらない様子の自室をひっくり返して立ちに必要な物を引つ張り出す。皆から貰った小さな袋に入るだけの荷物を詰めて、すっかり重くなった袋を背中に背負う。旅立つ間際に、木陰に置いていくしかない先生に視線を向けた。

「先生・・・行つてくるよ。」

小さな歩みは一步一步進み、悲しさと苦しさを振り払うようにその歩みは早くなつていく。森の中は風に揺れる木の葉が擦れ合う音だけが耳に入り、次第に方向と時間の感覚さえ曖昧になつていく。歩き続けるうちに次第に空は薄暗くなつていく。

「うう・・・疲れた、しかも暗いし・・・」

初めて触れるエデンの外、森に設置された看板を頼りに町を目指して進む。長距離を歩き慣れていないアリサの脚はすぐに痛みだし、何度も泣きそうになるがその痛みと涙を堪えて前に進む。一度止まっ

てしまったら二度と進み出せないと思つてしまったのだ。

(頑張らなくちゃ・・・先生に東にって言われたんだから・・・)

しかし現実はその簡単にはいかない。

(もう夜になった・・・真つ暗で何も見えない・・・)

森の中は夜になると一切の光が届かず、足元さえハッキリと見えなくなる危険地帯になる。本当なら夜も構わず突き進みたいところだが、既にアリサの体は疲労困憊だった。

「はあ・・・はあ・・・もうダメ、歩けない・・・」

疲れ果て、崩れ落ちるように座り込む。脚は自分の物じゃないみたいに言う事を聞かず、横になった途端電池が切れたように眠りについた・・・

### 《翌朝・・・》

「・・・ふわあ。」

鳥の囀りと風が木の葉を揺らす音で目を覚ます。

「イタタ・・・」

流石に手頃な岩の上で寝るのは無謀だった。体中がこの上なく痛いし昨日の疲れも残っている。しかしこの程度で立ち止まっている暇はない。

「早く・・・、早く行かなくちゃ・・・」

必死になつて歩みを進め、痛がる体に鞭を打つ。しばらく歩き続けた後に漸く森を抜け、今度は緩やかな坂道に出た。

「はあ・・・はあ・・・もう無理ちよつと休憩・・・」

誰に言うでもなくポツリと呟き、坂を下る道の脇に腰掛ける。まだまだ目指す先に街は見えてこない。今までにエデンを巣立った先人たちはこんなに過酷な道を通ってきたのかと思うと敬意を払いたくなる。やがて再び立ち上がり先を急ぐと、道行く先に一人の若者が立っている事に気づいた。若者の方もアリサに気づいて声を掛けてきた。

「君、そんなに急いでどこに行くんだい？それにその剣は・・・」

「行かなきゃいけないんです、東の街まで・・・」

「東・・・オールアンか。それなら僕の馬車に乗っていくといい、場所は荷台しか空いてないが歩くよりは・・・」

普通は知らない大人に話しかけられて妙に親切にされたら怪しむものだが、いかんせんアリサは疲れ切っていた。激痛を覚え始めた足は歩く事を拒否し、若者の馬車に乗る事を選んだ。

「ありがとうございます、こんなに・・・」

「いいよ、僕もオールアンに行く用があるし。」

馬車の荷台にアリサを乗せ、東を目指して進んで行く・・・

「そう言えば君、その剣はどうしたんだい？子供が持つには不相応な代物だが・・・」

「大切な人がくれたんです、大切な人が・・・」

また涙がこぼれ落ちそうになるが必死に堪える。だが必死に堪えてたあまり、若者が近づいている事に気づかなかった。

「全く、最近はいいい時代になったものだ・・・こんな簡単に金目の物が手に入るなんて。」

若者は懐から短剣を取り出し、右手の短剣を振り回してアリサに襲いかかった。若者は盗賊だったのだ。アリサは慌てて飛び上がった。拍子に荷台から転がり落ちて背中を地面に打ちつけ、襲いかかる若者から逃れようと必死に走り出す。だが彼女の脚は既に疲労困憊でゆっくり歩くのがやっとだった。そんな状態で走ろうとすればどうなるかは明らかだ。

「あつ!?あ、脚が・・・!!」

激しい痛みが骨の髄まで響く、あまりの激痛に脚を抱えてうずくまるが若者はすぐそこまで来ている。

「逃げるなよ?大人しくその剣をくれりや痛い目には遭わせないからな・・・」

「や、やだ・・・」

短剣を首筋に当てられて剣を要求されるが先生の剣を渡すまいと必死に剣を抱きしめる。だがそれは「痛い目に遭ってもいい」と言っているのと同じだ。



「そうか・・・恨むなよ、剣を渡さないお前が悪いんだ・・・」

若者はその短剣でアリサの首筋を斬ろうと柄を握る。だがアリサの首から血が出る事は無かった。短剣が文字通り何かに弾かれて宙を舞ったのだ。

「誰だあ？せつかくの稼ぎを邪魔しやがって・・・」

若者が振り返った先にいたのは、1人の女性だった。左手に飾りの無い実直な剣を握り、背中に更に2本の剣を背負うその女性は左腕を大きく振りかぶり・・・

「フンツ!!」

・・・思いつきり投げつけた。投げられた剣が直撃した若者は断末魔さえ上げず、砕けた顔面から鮮血を噴き出して倒れた。

「あーヤダヤダ、まーた剣投げちやったよ。隊長からいい加減投げるのはやめろって言われてるのに・・・」

大変気怠そうにブツブツと呟きながら女性は自分の剣を拾い上げ、傍らに倒れ伏すアリサに声をかける。

「大丈夫？」

「・・・え？あ、はい・・・」

「よかったー、近頃は子供相手に稼ぐ悪党が絶えないんだよねー・・・ホラ、立てる？」

女性が伸ばした手をアリサは掴まなかった。

「あ、そっかー・・・そりゃあんなのに襲われた後じゃ怖いよねー。じゃあほら、これ見て。」

女性は自分の右胸に輝く、銀のシンボルを見せる。

「私は王国近衛兵団第六隊隊長！王国と人々の平和を守るために戦う剣士なのだ!!」

## オールアン

「私は王国近衛兵団第六隊隊長！王国と人々の平和を守るために戦う剣士なのだ!!」

剣を携えた見知らぬ女性が発した言葉、それを聞いたアリサは：：「……………?」

「あ……………そっか、田舎の子は知らないか……………オールアンとかだと子供はみんな目を輝かせるんだけどな……………」

「田舎……………」

「まあいいよ、いつか説明するから。それより……………キミ、もう歩けないでしょ?連れてってあげるよ。」

「いや、いや……………」

「だーい丈夫！私はさっきの下劣なクズと違って近衛兵団の剣士だからね！この銀のシンボルに誓って悪い事はしないよ?」

嫌がるアリサをひたすら説得し続け、漸く折れた彼女は大人しく女性の背中に背負われてオールアンを目指した。

「脚とか痛くない?大丈夫?」

「……………はい」

「痛かったら言ってね?簡単な処置ならできるから。」  
「……………」

「お嬢さーん?お返事はー?」

アリサは女性の背中ですやすやと眠っていた。

「……………zzzz」

「あちやー、寝ちゃったかー。まあいいや、街に着くまで寝ててくれる方が楽だし。」

久方ぶりに休息を得たアリサは女性に運ばれてオールアンへ行く。先生との約束を胸に。

「ううん・・・」

簡素なベッドの上でアリサは目を覚ます。木造の小さな部屋は暖かく、枕元には食事が備えられていた。

「ごはん・・・いただきます。」

長旅で空腹も限界に達した彼女はパンに食らいつき、久しぶりの美味しさを心行くまで味わう。誰かが訪ねて来ている事に気づかない程に。

「あ、あのく・・・」

「・・・え?」

「し、失礼しまーす・・・」

部屋の戸を開けて入って来たのは、金髪が眩しい少女だった。

「起きたんだったら、一応コレ渡してって言われてて・・・ハイ。」  
「?」

少女が渡してきたのは一枚の紙、そこにはあの女性がアリサに宛てたメツセージが書かれていた。

『本ツ当にゴメンツ!!私、忙しいからすぐに行かなきゃいけないの! キミのお世話は宿にいた女の子がやってくれるらしいから、困った事があつたらその子に聞いて! キミが持ってた剣ならその子が預かってるから!』

あと服は汚れてたから着替えさせちゃった! 元々の服も女の子が預かってるからね!』

ハツキリ言ってるなんていう他力本願。大の大人が見ず知らずの少女に頼み過ぎである。

「ハイこれ、君の持ってた荷物全部揃ってるから。服は洗っちゃったから明日まで着れないけど・・・」

「・・・ありがと。」

「ねえねえ、君ってどこから来たの?」

「エデン・・・ずっと西の方。」

「エデン? 聞いた事ないけど・・・小さな子が一人で大変だったでしょ? ゆっくりしていきなよ。」

食事の合間に答えながら会話は徐々に弾んでいく。もつとも見知らぬ少女の方が勝手に弾ませてるだけで、アリサは楽しいお喋りなんてしている余裕は無いが。

「・・・小さくない。もう十三歳だから。」

「え？ボクと同じ年!?（年下だと思ってた・・・）あ、そうだ。まだ名前言ってなかったね。ボクはウイル・カット・リーバス！リーバス男爵家の娘だよ！ねえ、キミは？」

「・・・アリサ。アリサ・ロム・エーデン。」

「そっか、じゃあアリサって呼ぶね。ねえアリサ、キミって何処に行くアテあるの？」

「・・・ない。」

「じゃあ一緒に『コレ』受けよっ？」

ウイルが提示した「コレ」は、一枚の紙だった。

『王国近衛兵団、団員募集中。王国の人々と平和を守るため、剣を手に取り戦おう』・・・最近物騒な世の中だからさ、近衛兵団が団員募集してるみたい。」

「王国近衛兵団？さっきの人も言ってたけど・・・何それ？」

「えっと・・・王国近衛兵団ってのは、王国に仕えて戦う剣士達なんだ。王都とかオールアンみたいな大きい町だと結構有名で、毎年何人も応募してるみたいだけど1人合格したらいい方なんだって。大半の人は不合格になっちゃうみたいだけど・・・きつとイケるって！アリサだってそんなすごい剣持ってるんだから合格するよ!!」

今の話で王国近衛兵団とやらが如何なる存在かはアリサにもなるとなく伝わった。しかし受ける気にはなれなかった。第一アリサは王国に仕えて戦うなんて大層な仕事が自分に出来ると思っていなかった。大好きな先生と死に別れ、故郷の地は引き裂かれ、形見の品を抱えて泣きながら旅に出た自分に務まるはずがないと。

「無理だよ・・・」

「え？」

「私にそんな事できないよ・・・この剣だって急に渡されただけで、本当は私の物じゃないのに・・・戦った事なんて無いのに、まともに剣

を握った事さえないのに・・・」

考えれば考えるほど後ろ向きな感情が止めどなく溢れてくる。本来なら彼女は此処にいる事もなかった。ただ運命の悪戯に翻弄され、流れ着いたこの場所も安息地ではない。不安と孤独が彼女の中で少しずつ積み重なり、心に僅かな亀裂が生じる。

「・・・アリサ。」

「・・・?」

「そうやって後ろ向きで、自分には出来ないって思ってたら何も出来ない。大事なのは後ろを振り返る事じゃなく、前を真つ直ぐに見ている事・・・だよ?」

後ろを振り返る事じゃなく、前を真つ直ぐに見ている事・・・言葉に込められた力がアリサの心に響く。思えば自分は後ろ向きな事ばかり考えていたとアリサは思い返す。先生の事を思い出す度に流れる涙を拭い、約束を守るために・・・幸せになるために、頑張らなくてはいけないと一念発揮。

「・・・やるよ。」

「ホント!?!」

「受けるよ。その募集。」

「やったー!!ホントにありがとう!実は1人で受けるのちよつと怖かったんだよね!!」

一緒に行く仲間ができたと知った途端ウイルは一気に上機嫌になり、アリサの手を握ってブンブン振り回すほどテンションMAXの状態である。振り回されているアリサの身にもなってもらいたい。

「ちよつと、手離して。」

「あ、ゴメンゴメン嬉しくてつい・・・」

それからも2人はお喋り続けた。ウイルはともかくアリサは会話が苦手な部類だったが、少しずつ打ち解け始めて表情も大分柔らかになっていく。

「ていうかボクもキミも食い扶持稼がなきゃだから、この宿だってタダじゃないし・・・」

「そっか、私もお金必要なのか。エデンじゃお金使わないから・・・」

「そう、そしてただの子供なボク達がお金稼げるのは近衛兵団ぐらい・・・だから受けなきやなの。」

結構リアルな事情が突きつけられたアリサ、そしてそれを解消するためには近衛兵団への入団が必須事項だった。上手く乗せられた感が否めないアリサであった。

「あれ？もしかして予定調和だった？」

「アハハ・・・」

## 採用試験

近衛兵団の採用試験当日、アリサとウィルはお互いに剣を携えて町外れの廃墟へと足を運んだ。会場では百人以上の男達が睨みをきかせており「自分こそが採用されるに相応しいのだからお前らは帰れ」と言わんばかりの殺気を放っている。当然アリサ達のような子供はおらず、特に背が低いアリサはウィルと手を繋いでいないと見失いそう。ウィルも144cmしかないけど。

「ウィルって剣持ってたんだね。」

「当然！・・・そんなに強くないけどね。」

山程集まった人間の波を掻き分けて会場の中央まで進むと中央に一人の男が見える。その男は群青色のコートを纏い、胸に銀の星を掲げている。

「・・・！アリサ、アリサ！みてあの人！」

「銀の星・・・あの人と同じ！」

「あの人、本物の近衛兵団だよ！アリサを連れて来た人と同じ！」

「・・・定刻だ。」

男は小さく呟き、手にした懐中時計を懐に仕舞うと集まった群衆に呼びかけた。

「これより第十三回近衛兵団団員採用試験を行う。」

その言葉を聞いた瞬間、空気が強張り全員の緊張感がピークに達した。例えばどんな苦行を受けても合格してやるぞという気迫を最大限に強く感じる。

「採用試験は三段階に分けて行われる。全ての試験を突破した者だけが近衛兵団として王国に尽くす術を得るが・・・試験の最中に負傷、或いは死亡した場合自己責任として処理される。我々は責任をとらない。その点を理解した者は・・・最初の試験が始まる。」

この試験には命をかける必要がある。そう理解した瞬間アリサの脳裏をよぎる光景があった。エデンの木陰に置いて来た、大事な人の無残な姿。自分もそうなってしまうかもしれない・・・そう思ったと同時にアリサの足は一步だけ下がった。もう一步下がろうとした時、

ウィルがアリサの手をとった。

「ウィル・・・」

「アリサ、大丈夫だから・・・ね？」

その言葉には不思議と安心感があつた。逃げ出しそうになつた心はその場に繋ぎ止められ、試験に臨むために覚悟を決めようと心を落ち着かせる。人の心に働きかける言葉の力、それがウィルから感じられた。

「・・・帰る者はいないようだな。では最初の試験について説明する。」

男はさつきまで自分が立っていた場所の後ろにある扉を開けた。

「この先は地下水道に繋がっている。その中を通り三刻以内に反対側の出口に辿り着け。そうしたら最初の試験は合格となり、第二の試験に移る・・・始める。」

瞬間男は扉の前から消え去り、その場にいた全員が扉に向かって走り出した。扉の前は押し合いへし合いの大騒ぎだ。

「アリサ、行くよー！」

「う、うんー！」

扉の前は人でごった返しているがなにせアリサ達は子供だから体が小さい。スルスルと人の波を突破して扉の中に突入した。扉をくぐり階段を駆け降りまた扉をくぐり・・・水の音が聞こえた気がしたと思つた直後、アリサ達の視界に飛び込んで来たのは隣を流れる水と酷く入り組んだ通路だった。

「長ツ!? しかも広ツ!?」

「これ・・・道わかるの?」

「わかんない!とにかく行こう!!時間ないつて!!」

一心不乱に走り出す2人、だがこの空間は同じ景色ばかりで動けば動くほど道がわからなくなる。おまけに水の流れる音が邪魔で周囲に人がいるのかどうかすら把握できず、ゴールの方向も分からずに彷徨い歩く羽目になるのだ。この最悪な環境を乗り越えてゴールに辿り着く事こそが最初の試験なのである。

「ちよつと待って!ここ絶対来た事あるつて!!さつきと見た目おんなじだもん!!」



「いや、でも五回右曲がった後で左曲がったから・・・」

「いや絶対同じところグルグル回ってるって!!」

この試験は脳筋なアリサとは相性が悪すぎる。長い長い通路を直向きに先へ進み続ける度に余計に迷い、帰り道も分からないまま突き進み生還すら危ぶまれるレベルの迷子になりつつある。

「すぐ戻った方がいいって!じゃないと絶対迷子だから!!ホラこつち!!」

ウイルが力づくでもアリサを連れ戻そうとした時、彼女の髪を風が微かに揺らした。

「・・・わかった!こつちだよアリサ!!」

「え?え?何が?どういう事!?!」

「今ちよつとだけ風が吹いたの!だからこつちに出口があるはず!!」

一応風が吹いただけであって出口があるとは限らないのだが、今の彼女達に他の選択肢は無い。その脚で向かう先に目指す出口があると信じて走り、息が切れてもなお走り続ける。そしてその目に久方ぶりの光が飛び込んできた。その光を超えた向こう側にいたのは近衛兵団の男と数十人の参加者だった。

「やった、やった・・・」

「よかった・・・間に合ったよアリサ・・・」

二人とも肩で息をする程疲れ、酷使した脚を休めようとその場に座り込む。だが無常にもすぐに休憩は終わった。

「三刻経った。第一試験は締め切りだ。」

二人にとつてはあつという間の出来事のようなだったが、地下で右往左往しているうちに時間は経っていた。そして次の試験が始まる。

「第二試験も話は簡単だ。今俺が持っているこのペンダント・・・これを俺から奪い取れ。」

## 一握りの栄光

いつの時代も栄光を掴むのは一握りである。大半の人間はそこに至るまでの間に挫折し、僅かな生き残りさえもほんの少しの怠慢で崩れ落ちて行く。そして最後まで生き残った者は、大抵が栄光の意味を理解できぬまま終わるのだ。

何が言いたいか簡潔に纏めると、近衛兵団という栄光を掴もうとする者達が倒れ伏して行くという事だ。

「どうした。入団の切符を掴むどころか、この程度で倒れるのか。今年も不作だな。」

男に疲弊した様子は無い。だがその周囲には満身創痍で倒れこむ受験者達が山を築いていた。中には殺す気で奪い取ろうと剣を抜く者もいたが、男はそれを徒手格闘で返り討ちにしてみせた。

「アリサ、あれヤバいって……」

「絶対取れないよ……」

この試験において二人は偶然にも賢明な判断をした。他の受験者が碎け散っていくのを目の当たりにした衝撃以上に、以下にして攻略するかを考察する時間を得られたからだ。

「……こんなものか、やはり一般人の中から厳選するなどこうなつて当たり前か。」

第一の試験を突破した受験者のうち、半数は第二の試験開始と同時に飛び出した。彼らの特攻が結果を出す事はなく、何人がかりであろうとも流れるように無力化されて地に倒れ伏す事になった。様子見をしていたアリサ達含め残りの半数は作戦を練る時間が与えられたのだが、その時間を有効に扱えるかどうかは別問題である。

「残ってた人達も戦い始めたけど……」

「……ダメだね、これ。」

全員半ばヤケになつて突撃し始めたものの、やはりそう簡単にいくはずはない。次から次へと返り討ちに遭い、あつという間にアリサとウィル以外は全滅した。

「さあ、残っているのはお前達だけだ。かかってこい。」

「・・・言われなくても！」

アリサは遂に剣を抜き、臨戦態勢へと突入する。

「くっらえっ!!」

「・・・遅い。」

例え渾身の力で剣を振ったとしてもアリサと相手の体格差は圧倒的、刃が触れる事も無く蹴り上げられてアリサの体は中を舞う。

「ウイル！」

「・・・ッ！死角からかッ!!」

アリサの突撃はフェイク、本命は相手の意識がアリサに向いた隙にウイルがペンダントを奪取する事だった。兵団の男にとってアリサは遥かに格下の相手だが、それでも斬り合う最中に意識を逸らす事はなかった。これは男が高い実力を有するが故であり、剣士としての本能を突いた連携を即興で実行した。だがそれでも届かない。

「ぬるいッ!!」

驚異的な反射速度、そして恐るべき近接格闘能力。完全に視界の外から襲いかかったウイルを巧みにあしらい、体勢を整える間もなく地に打ち付けられる。この時点で連携は崩れた。だがまだ終わったわけではない。

「まだまだッ！」

作戦が瓦解したと同時にアリサは突撃した。当然無理に突撃したところで結果は変わらないが、今度のアリサには別の作戦があった。

「どりゃッ！」

「・・・無駄な事を。」

まず渾身の力で上に飛び上がる。当然この程度の奇策は通用せずすぐうでに捕まる。だが肝心なのはその後である。

「どうだッ!!」

胸倉を掴まれた後、まだ動かせる下半身を揺らした勢いのまま足を限界まで伸ばし、男のペンダントを足で奪い取った。

（・・・バカな、まさか足で掴むとは・・・。）

そしてアリサがペンダントを掴んだと同時に男はアリサの胸倉を掴んでいた手を離す。そうなるとアリサの体は下に落ちていくのだ

が・・・ペンダントを掴む事で頭がいっぱいだった彼女は思いっきり地面に激突した。

「痛ったあッ!？」

「アリサーーッ!？」

せつかく第二試験も突破したのに二人は満身創痍であった。特にアリサなんて既にズタボロだしウィルも強引に押さえつけられた弊害から体中バキバキである。だが休む暇さえ貰えないのが現実というものだ。

「立て、お前たち二人は次の試験に進める。ついて来い。他は動かないから失格だ。」

本当ならこの時点でまだ動ける奴は次の試験を受ける事ができたのだが、いかにせん壊滅状態なためアリサとウィルだけが先に進む事が許された。

(まさか最後まで生き残ったのが二人とも女、しかも子供とはな。)

最後の試験を行う場所へと向かう道すがら、こんな事は初めてだと考えを巡らせる。彼が近衛兵団に身を置き、隊長を務めるようになってから早五年。その間もその前もこんな状況は無かった。もしかしたら、彼女らは何か違う風を吹かしてくれるのかもしれないと思いなから歩みを進め、遂にその場所へと辿り着く。

「ここは・・・?」

「ここは近衛兵団の団員が使う訓練場だ・・・さて、今から最後の試験を始める。お前たちが握るその剣で俺と戦え。今度は俺も剣を抜く。命の限界まで追い詰めるから覚悟するように。」

突然のデスマッチ宣言に二人共一瞬固まるが、すぐに復活し剣を抜いて斬りかかる。だが相手は徒手格闘で二人の剣を防ぎ切った猛者である。そんな実力差が真剣を握ればどうなるか、答えは明らかだ。

「・・・そんな剣では藁も切れはしない。」

「ハアッ・・・ハアッ・・・ダメだ、これ・・・」

「ボク達がかでできる強さじゃないって・・・」

桁違いの強さ、アリサもウィルもまともに人と斬りあつた経験は無

い。そもそもアリサの場合練習では先生が加減してくれてたし、今回と違って真剣を振ることも無かった。そんな二人が戦闘経験豊富な近衛兵団の隊長に勝てるなんて奇跡が起きなきゃありえない。

「痛い・・・死ぬってこれ・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

アリサの脳内を駆け巡るのは「死ぬ」という言葉、連想するのは家族同然の存在だった恩師の姿。木陰に置いてきたあの無残な姿が鮮明にフラッシュバックし、あらゆる感情がドロドロに混ざり合って涙が止まらなくなる。

「先生・・・」

涙で濡れた頬とは逆に、体は熱く煮えたぎったような強い力を感じる。そしてその力を糧に立ち上がり、剣の柄を力強く握りしめて剣を振るう。

(まさか、これは・・・！)

その剣は先程までの剣とは比べようもないほど鋭く、そして強かった。まるで悪魔にとり憑かれたかのような血走った瞳で一心に相手を捉え、強く握り過ぎて血が滲む手で剣を振り回す。挙動自体はアリサそのままののだが、臂力も速度も桁違いな力で強引に切り結ぶ。そしてさらに、その剣戟に喰らいつくもう一人の姿。

(・・・ッ！こつちもかッ!!)

ウィルもまた、アリサと同じ状態にあった。身を裂くほどの痛みを力に変えて、一心不乱に剣を振り回す。二人とも本来ならば立っていない程の重傷であり、そんな状態で剣を振り回し戦うのは自殺行為にも等しかった。その事実を汲み取った相手は速やかに、正確な剣戟によって、二人の意識を奪った。

## 王国近衛兵団

「……話を纏めよう。確かに二人共だったのだな？」

「……はい。気絶する直前の僅かな時間でしたが、確かにあれは『巡帰』でした。」

円卓を囲う八人、その内一人はアリサ達が受けた試験を担当していた男だ。

「……シヴィルス、例えその二人が『巡帰』に目覚める兆しを見せたのだとしてもだ。まだ彼女等は……」

シヴィルスと呼ばれた男が口を開く。

「年齢に関しては最早、意味は無い。この組織を設立した男の伝説を忘れたか。」

「あれは特殊だ。時代が時代だからな。」

「今も同じだろう。戦力は一人でも多い方がいい。」

「貴様、今戦力と言ったな？ 近衛兵団を殺戮集団か何かだと思っているのか？」

「敵はこちらを殺す気で襲いかかって来る。それに対する力を戦力と言わずに何と言う。」

「貴様……」

「……落ち着け、隊長格ともあろう者が口喧嘩など笑えんぞ。」

いがみ合う両者を一人の男が止めた。

「我々は私欲を捨て、王国に奉仕する剣士。もしその少女等が入団するに相応しくないのならば、その時は放逐するまで。」

「団長……本気のおつもりで？」

「勿論本気だとも……」

団長と呼ばれた男がゆっくりと言葉を続ける。

「全ては王国のため、我々は一丸とならねばならん……」

「……ん？んつと……？」

小さな部屋の片隅でアリサは目覚めた。ベッドの上、隣には未だ寝

たままのウイル、そして二人とも汗だく……この年齢でなければあらぬ誤解を受けそうである。

「私なんてこんな所に……」

その答えは突然やって来た。採用試験の試験管を担当していた男が現れたのである。

「お前たち、採用試験の結果を伝えるが……その前にそこで寝ている女を起こせ。」

「は、はい！ウイル、起きて……」

暫く揺すつていると漸くウイルもお目覚め、そして目の前にいる男の眼光にすくみ上がって大人しく正座した。

「試験の結果は……」

正直な話二人共期待はしていない。第一の試験はほとんど運だけ、第二の試験は奇跡に等しい無謀な勝ち筋による結果。加えて最後の試験は途中で意識を手放してしまった。これで合格なんてありえない……

「合格だ。」

「……え？」

「合格だと言っている。」

一瞬相手が何を言っているのか理解できなかつた。だが「合格」という言葉が頭の中を反復し、漸くその意味が理解できた。

「お前達は合格するに足りるだけの事を示した。これを渡そう。」

彼が渡した物は王国近衛兵団の制服と、その胸に光らせる銀色のバッジ。正式に近衛兵団に採用された証を手にし、その事実に見える。毎年何人もふるい落とされると噂の採用試験を突破したのだ。実感は湧かないが。

「とつとと着替えろ、終わったら部屋を出ろ。」

そして彼は出て行つた。アリサ達は制服に袖を通し、バッジを胸に部屋を出る。

「あの……着替えましたけど。」

「これ、袖と裾が長すぎませんか？ボクもだけどアリサなんて更に……」  
「文句なら用意した奴に言え……全く、女は怖いだの文句ばかり出る。」

どうやら二人の制服を採寸した奴は十三歳の女の子さえ怖がるようなロクデナシらしい。おかげで二人共袖と裾を折りに折って漸く手足がまともに機能する有様。なんとかして正しい寸法の制服を作って貰わねば邪魔で仕方がない。

「・・・言えばまだ名乗ってなかったな。俺は王国近衛兵団第七隊隊長、シヴィルス・ライン・アーケイン。お前達の名は？」

「あ、アリサ・ロム・エーデンです！」

「ウイル・カット・リーバスです！あ、リーバス男爵家の長女ですよ！」  
「そこ大事なのか・・・？まあいい、今からお前達は第七隊の隊員となる。ついて来い、隊員を紹介してやる。」

シヴィルスに連れられてやって来た二人、「第七隊待機室」と書かれた扉を開けた先には三人の男がいた。

「隊長殿!!」

「・・・暑苦しいのはよせ。」

固く掴まれた襟を払い、静かに且つ威圧を込めて口を開く。

「いいか、ここにいる二人は新しく第七隊に入隊した新人だ。仕事の内容も逐一教えてやれ。それと女が入ったからと浮かれるな、肉欲に駆られて本文を忘れるような輩は斬る。特にリユーゲン、貴様は気をつける。」

「はいはいはい・・・。」

リユーゲンと呼ばれた男が返す。

「隊長殿の事は尊敬してるし、淫行即罰則の精神も賛成ですけど？人の事を猥褻行為常習犯みたいに言うのはやめてほしいですね？」

「任務中の自分を見てみる。それが王国に奉仕する剣士の態度か。」

「あ、あの・・・隊員を紹介するっていう話は？」

「アリサ、今が多分一人目だよ。」

「そういう事だ。リユーゲン、後は自分の口から言え。」

「はくい・・・初めましてだね♪僕はリユーゲン・ミック・エリトナム、仲良くしようよ。」

その瞬間アリサとウイルの体に寒気が走る。これが「生理的に無理」というやつなのかと思わせたその手腕はある意味尊敬に値する



が、男として大事な何かを失っている気がする。

「んじやあ次は俺だな。俺はアルバ・ルゲン・カムルガ、二年前から近衛兵団に所属している。よろしくな。」

「それじゃ、最後は俺か。ゼムル・シエク・マークス……適当に呼べ。どうせ気にもならない。」

「あ、アリサ・ロム・エーデンです！」

「ボクはウイル・カット・リーバス！リーバス男爵家の長女です！」

「全員の紹介は終わったな。本当は後二人隊員がいるんだが、そういった等は今で払ってて留守だ……さて、アリサとウイルに良い知らせだ。今から早速初任務に就いてもらおう。総員、着剣。」

「二」ハッ!! 「二」

「一」あつ……は、ハッ!! 「一」

「残る二人の隊員が現地で待機中だ。そいつ等と合流し、街中に潜む『政教派』とその協力者を捉える。行くぞ。」

## 近衛兵団の仕事

王国近衛兵団は王国の治安維持に努める組織であり、国政の実権を握る宰相とも繋がりのある部隊である。その権力は絶大であり、特に隊長達は優れた能力・・・特に剣術の力量から後釜たり得る人間がおらず、一人でも抜けたら後任の隊長が用意できる保証も無い。故に彼ら隊長達は相手次第で殺人すら許されてしまう。迂闊に処罰すれば取り返しのつかない事態が起こり得るからだ。

一見すると狂気的にも思えるこの待遇も、そのような環境下で「己を律する精神」を鍛えるための「精神修行」として機能しているのだ。だからこそ彼ら近衛兵団は人々から尊敬の念と羨望の眼差しを一身に受けているのである。

「オールアンに『政教派』の一派とその協力者が身を潜めている。俺達は先に捜査を始めている第七隊員二人と隠れ家で合流し、発見次第拘束して王都に送還する。」

オールアンの街中、寂れた路地裏を第七隊の面々は通り抜けている。近衛兵団が一隊単位で動いている様は大衆の目に鮮烈に写るのだが、目立ち過ぎると狙っている相手が行方を眩ましてしまうかもしれない。彼らの仕事は難儀なのだ。

「あのー隊長・・・ボク地元じゃ世間知らずで有名なんだけど、政教派って?。」

「簡単な話だ。王国の政治に口出しする宗教勢力の総本山。二十年以上前に全滅したと思っていたが、各地で細々と生き永らえつつ再起を図っていたわけだ。」

「へー・・・」

「政教派・・・」

そう呟いたアリサの顔は不機嫌なように見えた。本人にも何故かはわからないが、政教派と聞くと何か感じるモノがあるのだとか。

「宰相殿が政権を握ってから早十二年、それ以前に実権を握っていた連中に見れば今の王国は窮屈な事この上ないだろう。あらゆる横暴がまかり通る時代に回帰したい奴らは多いからな。」

そして一同は隊員二人が身を潜めている隠れ家に到着した。そこは以外にも人通りの多い繁華街のど真ん中にある商店擬きであり、とても隠れ家には見えなかった。

「本当にここに仲間が？でもここ……」

「隠れ家に見えない……そうだろうな。だが怪しまれない事は大事だ。多人数で出入りしても不審に思われないようにな。」

「……はい。」

早速色々学びながら隠れ家の扉を開ける。その中には一組の男女が居た。

「隊長、随分とお早い到着で。」

「早く終わらせたかったからな、事を急いだわけだ。」

「たいちよう♪久しぶりにお会いできて嬉しゅうございます♪あら？その子達は？」

「新入りだ。アリサとウィル……挨拶ぐらいは自分でしろ。」

「は、はい！アリサ・ロム・エーデンです！」

「ウィル・カット・リーバスです！リーバス男爵家の一人娘ですよ！」  
「うちに新人が二人、しかも女の子なんて……楽しい事になりそうね。」

「隊長の試験を受けて合格したんなら、素質はあつたつて事だろう。この仕事でそれを証明してみろ。」

これでようやく第七隊の面々が勢揃いした。一同は情報交換と休息を兼ねて腰を下ろし、これから成すべき事について話し合った。

「オルソ、ミネルバ。何を何処まで掴んでいる？」

「政教派を掲げる団体が街中に隠れているのは掴んでいます。だが入念に痕跡を消しているようで、追跡はおろか構成員は何人いるかもわかっていません。」

「確認できた限りでは、複数の男爵家が資金提供元になっているみたいですわね。政治的な思惑が結構複雑に絡み合っているようでして、どこか潰すだけでも一苦労しそうですわ。」

「それ以上具体的な情報は無いと？」

「残念だが、これで打ち止めです。」

「わたくしもこれ以上は望めないので、強行手段もできそうにないですし……」

手詰まり、端的に言えば現状はその一言に尽きる。二人が築いた情報網ではこれ以上の進展が見込めず、かといって更に深い情報網を構築しようものなら獲物に警戒され、その尻尾を掴む事は更に難しくなる。しかも実力行使で行こうとしてもまだ強行手段に踏み込めるだけの証拠がない。事態は暗礁に乗り上げだした……

「隊長、提案が。」

「言ってみろアルバ。」

「俺達は向こうに顔が知られている可能性がある。隊長は当然として、俺達隊員も知られている可能性は排除できない。じやなきやアイツらが本気で調査して何も掴めない事を説明できない。」

「……何が言いたい?」

「ここにいるじやないですか。まだ顔を知られていない隊員が二人も。」

そう言つてアルバはアリサとウイルを指差した。

「……?」

アリサは何が起きているかサツパリ分からず間の抜けた顔になり、ウイルは何が起きようとしているのか理解したのか汗だつくだけである。

「この二人が正体を隠して敬虔な信徒のフリをし、奴らにわざと目をつけられる。勿論俺達はその間囪も兼ねて別手段の調査を実行します。」

「どうやって目をつけさせる気だ。」

「奴らに関与している男爵家は確認を取れたんだらうオルソ。ソイツらとは別、しかも子爵家との繋がりを仄めかすように細工を施す。」

「え、えつと……つまり?」

「アリサ、えつとねえ……ボク達これから……スパイになるみたい。」

「え……?ええくツ!」

人生で一番デカい声で驚いた。後にも先にも、彼女がこんなに驚い

た事は無い。

《オールアン市内 裏通り》

作戦は速やかに決行された。アリサとウィルは近衛兵団員である事を隠して政教派の団体に接触を図り、他の団員は二人と情報交換を行いつつ資金提供元の調査。爵位を持つような家は近衛兵団を無碍に扱えないし、万が一彼らの機嫌を損ねて権力者達に目をつけられれば男爵家なんて簡単に滅びるから対応は最大限の礼節を持って行わねばならない。その考えを利用するのである。

「ここは倒壊しかけて以来放置された地下聖堂だ。身寄りの無い子供が神に祈るにはうってつけというわけだ。」

「あ、あの・・・本当にこれが作戦なんですか・・・？」

「ボクあんまりいい暮らししてこなかったけど、流石にここまでボロボロにはならなかったな・・・」

アリサ達の身なりはボロボロを通り越してズタズタである。確かに近衛兵団の団員には見えないだろうが、これはこれで違う問題が生じそうである。

「夜になったら隠れ家に戻って来い。それまでは極力、俺達との接触は避ける。」

「はい！隊長！」

「上手く立ち回れよ・・・救助に行けるとは限らんからな。」

そう言い残してシヴィアス隊長は去って行った。

「・・・えっと、頑張ろうかアリサ。」

「うん・・・」

いきなり課せられた重大任務。しかし・・・或いはこれも運命か、歯車は回り始めていた。